

經濟論叢

第七十七卷 第一號

- 住民税の問題點……………神戸 正 雄…（ 1 ）
- 資本主義より労働主義へ……………作 田 莊 一…（ 14 ）
- ケインズの一般理論について……………柴 田 敬…（ 33 ）
- 中國農業金融の蹤跡……………德 永 清 行…（ 44 ）
- アメリカ經濟管見……………堀 江 保 藏…（ 63 ）
- ラダイツ批判……………穗 積 文 雄…（ 80 ）
- 恐慌と地代……………鶴 嶋 雪 嶺…（ 98 ）
- ベンサムの功利主義體系……………山 下 博…（ 113 ）
-

[昭和三十一年一月]

京 都 大 學 經 濟 學 會

資本主義より労働主義へ

作 田 莊 一

一 ま え が き

「資本主義か社会主義か」と言う標語は、マルクス、エンゲルスが「科學的社會主義」を提唱して以來、前世紀の末頃からヨーロッパに廣まつて往つた。それが今世紀の初期にロシアの共產主義革命が成功した後には、マルクスの通りに「資本主義より社会主義へ」と必至的に移行すると叫ばれるまでに發展して、これを信ずる人々が多くなつた。私が第一次世界戦直後にヨーロッパに往つた頃には、「資本主義か社会主義か」と題する書物を數多く店頭に見出したので、それらを見つけ次第に買求め歸國後に讀んで見た。その頃から私はこの問題に深い關心を抱き、特に日本も資本主義より社会主義に必至的に移るであらうか、またその方向に乗つて日本を社会主義化する運動が肯定されるべきかを熟考した。この一篇はその問題に對する私の解答である。

マルクスは資本主義より社会主義への移行をば社会自然法則の必至性に見出し、またその推移を實現する者は共產黨の革命活動及びその後の建設活動にあると見て、第二次的に國家意志法則を示唆した。そしてマルクス、エンゲルスは自然法則に隨つて先づ共產革命が起る國は、資本主義の最も早く成熟せるイギリスであると見た。然る

にこの科學的豫見は全く外づれたのみでなく、ロシヤ革命後三十八年を過ぎた今日まで、資本主義の成熟期にある國にて社會主義に移行した國は一もなく、ロシヤの衛星國に追込まれた國々の中でも、最も強く共產主義化に抵抗した國が資本主義の成長してゐたチエッコであつた。それだけでなく更にロシヤに倣つて共產主義に進出した國が革命當時のロシヤよりも資本主義經濟として遙に幼稚である中國であり、それと同じように立後れたインド、ビルマ、ヴェトナム、インドネシヤなどがロシヤに倣はうとする趨向が見られる。かかる大勢は明かに「資本主義より社會主義へ」と唱へたマルクス理論の破綻となるが、周知の如くレーニンはその點を次のやうに辯解してゐる。マルクスの時代にはまだ出現しなかつた最近の世界資本主義經濟にあつては、その世界生産關係の中に最も弱い環が先づ破れて、そこに社會主義經濟が擡頭する。資本主義經濟の未熟であつたロシヤがそれであつたと。そう考へればロシヤの次ぎに中國以下の弱い環が破れて社會主義化する趨向は肯かれる。然らば資本主義の成熟せる英佛獨米日の如きは、世界資本主義經濟の中にて強い環となつてゐるから、終りの方にて近世經濟の後進國の後塵を拜して社會主義化する段取りとなる。かくてはマルクス説が完全に逆行することとなるが、それも果して事實となつて来るかどうかは極めて怪しい。かくて我々は「資本主義より社會主義へ」の必至的趨向が果して眞實なるか否かについて、マルクスにもレーニンにも信賴が置けない。我々が邦國經濟（國民經濟）にとつて今日最大の問題となつてゐる經濟體制の變革について考へる場合には、これまでのものと異つた見方・考へ方を持つて來なければならぬ。この一篇はその見方・考へ方によつて、資本主義の後に來るものが何であるかを指摘しようとするのである。

私、がこれまで考へて來た結論は、「資本主義か社會主義か」「Capitalism or Socialism, ではなく、今後の新しい經濟體制は資本主義でも社會主義でもなり、Capitalism nor Socialism, と云ふことである。私はそれを「資本主

義か労働主義か」(Capitalism or Labourism)と問ひ、そして資本主義の後に來たるものは労働主義であると豫想する。この豫想に基いて明日の日本經濟は、今の窮迫しつゝある資本主義經濟より脱却して、全く新しい、しかも極めて日本流であり得る労働主義經濟に移るべきだと考えてゐる。

「資本主義か社會主義か」或は「資本主義か労働主義か」と言う問題を解くには、前以つてそれその主義についての概念を決めて置かなければ、無用な説明や議論を混入して趣旨が通らなくなる。資本主義や社會主義やの語は歴史的な意味を持ち、その内容には經濟以外の政治や文化や種々の特色を含んでゐるから、簡單には割切れない。それにしても何が資本主義か社會主義かを區別する主なる標徴は、やはり經濟生活の形相によらなければならぬ。その主標徴となるものは、國富の生成及び歸着と言う邦國經濟(國民經濟)の大筋を決めるところの生産業體及びこれらを盛るところの生産體系いかにある。

經濟一般について言うも、特に邦國經濟について見る場合でも、重點となるものは財物の生産であり、生産あつての消費である。生産は生産意志が生産能力を用いて生産行動を爲すことを内容となし、その生産行動は邦國を活動の場として分業をなせる事業として質營される。その質營の主體を生産業體と呼ぶ。然るにそれらの生産業體に對しては、上に立つて事業質營を國富の生成及び歸着の方向に運んで行く大なる力の動きが見られる。それが邦國經濟における總體運營である。この運營を爲す力の動きは、目に見えない手の指圖と言はれる社會自然勢力の動きなるか或は聞こゆる聲の號令とも言うべき國家意志威力の動きなるか、盲目的・無政府的なる社會力運營なるか或は企畫指令する國家力運營なるかである。何かの總體運營の下に多くの事業質營が行はれて國富が生成され行く大

筋が邦國生産體系である。これに國富の歸着が伴つて行はれ邦國經濟體系を全うする。

生産業體については生産資本の所有及びこれを用いる實營の主體いかに着眼する。これまでは私人が所有する資本を以つて發企し收果する私別的な生産事業が通例（官營業は例外）である場合に、これを資本主義經濟と名づけた。然るにロシヤが私有資本を沒收して國有となし、國有資本を以つて國家自ら生産事業を實營することを原則となすに及んで、新しい他の資本主義經濟が發生した。そこで舊資本主義を私別資本主義と呼び、新資本主義を公共資本主義と名づける。この場合にマルクス經濟學では公共資本主義と呼ぶことに強く反對するのであらう。勿論均しく資本と言つても、私別資本と公共資本とは邦國生産の作用において大なる差があり、社會主義下の公共資本は舊資本主義下の國有資本とも作用を異にする。そしてマルクス「資本論」に言う資本は一人が他人を搾取する機構に限定されてゐるから、その立場からは公共資本主義など言う名稱を受容れないだらう。しかし私はそれと違つた立場において、資本所有者の企業以外に勞働營爲者の企業を認めるから、これと違つた資本企業は、たとえ國家資本による國家の産業實營であつても、公共資本主義と呼ぶ以外に適切な表現を思ひつかない。なほまた私別資本企業と公共資本企業とは、事業の上に立つ總體運營に大なる相違がある。前者では自由資本主義時代には社會自然勢力が運營に當たり、改修資本主義時代に入りて、部分的に國家意志威力が運營に進出するが、後者では一貫して總統主義の國家運營を行ひ、それだけ社會運營を斥けて行く。ここには邦國生産體系において二者の大差が見られる。またここには邦國經濟を動かす經濟法則にも二者の間に顯著なる相違が見られる。それであつて資本所有者が生産業を實營することは二者に共通であり、會て以前に出現し、また後に出現するであらう勞働主義の企業が存在する以上は、これと對照せしめる必要から、今常識となつてゐる資本主義と社會主義とを私別資本主義と公共資

本主義とに改め呼ばざるを得なくなる。尤も前者は個人別資本主義であり、後者は社會化資本主義であるから、後者を社會主義と呼ぶことは不條理ではない。それならば前者は個人主義と言えよ。序に書き添えて置くことは、社會主義と共產主義とは、民有・民營の産業を官有・官營に移す點にて同じく公共資本主義に屬すると言ふことである。二者の差別はマルクス以來、國富の分配を各人の労働量に従つて行ふか各人の必要に應じて行ふかの差別である。これは物資が多く産出されるれば、必要に應ずる分配は可能となる。各人の願望に應じて與へるのでなく、必要に應ずるだけであるなら、今でも生活保障制度の充實せる國では事實上それを實行してゐる。經濟問題として大切なことは國富の歸着する分益消費の方式の進歩でなく、國富の生成する分業生産の様式如何である。そこでロシヤにて謂ゆる共產主義の時期に進出して、公共資本主義たる經濟體系には變化はない。

「資本主義か社會主義か」を「私別資本主義か公共資本主義か」と言改めて見れば、これは公私の差別はあつても「資本勞從」の生産體系をなす。生産には資本と労働とは不可缺であるが、それにしても生産業體の主人としては、資本所有者に限らるべきものでなく、労働營爲者をして主人たらしめる「勞主資從」の生産體系が新時代の脚光を浴びて登場するのではあるまいか。かかる重大問題を解くに當つて最も大切なる見方及び考へ方は、經濟發達の理論を明かにして過去の歴史と將來への志向とを一貫せしめ、その上に立つて明日の邦國經濟體制が何であり何であるべきかを見定めることにあると思はれる。

二 經濟發達階段の指標

以上述べたやうな概念を用ゆるならば、邦國經濟の發達階段について新たな見解を立て得ることとなる。經濟

發達階段については、歴史的現象を見る發達事記としてはこれまで種々の説が現はれてゐるが、歴史的法則を見る發達理論としてはマルクスの唱えた五階段説が最も廣く知られてゐる。この説の優れた點は、近世の經濟理論が殆ど皆、資本主義經濟の成立過程を説く一世代の成立理論に止まると異り、各世代を通ずる發達過程に注目せる發達理論に着眼せる點にある。それは周知の如く古代共同制、奴隸制、封建制、資本制、及び共產制の五階段を指摘してゐる。然るにこれは謂はば政治經濟の變遷を見たもので、純經濟體制が薄くなつてゐる。勿論邦國政治を離れた邦國經濟は存しないが、それにしても經濟自體の特徴が不鮮明である。尙ほまた經濟自體の特徴としても、最も重要な分業生産を後に廻はし、その後起たる分益消費に重きを置き、謂ゆる「搾取關係」を基本として考えたものである。それで奴隸制など言う日本その他の國に存しなかつたものを箝めこみ、封建制の如きも國によつて大差があり、政治體制を指すのか搾取分配體制を指すのか不明であり、資本制では歴史上劃期的な國富の増進を説くよりも價值法則を立てて勞資間の搾取關係を強調してゐる。もと社會主義なるものが國富歸着の分配を矯正する意圖から起つたもので、マルクスも一面には生産を重點とすと言いながら、彼の擧げた階段説は分配に重點を置いてをり、従つて經濟生活の理想としては、富が各人の必要に應じて分配せられると言うような低調なものに終つてゐる。これを日本人の傳統が開化本義の生産を目標として勤勉に終始することと比べるならば、思ひ半ばに過ぎるものがある。邦國經濟の重點とするものは、國富の歸着よりもこれが前提となる國富の生成であり、この見地より經濟發達階段を見通はさなければならぬ。

生産の原動力となるものは人の生産意志であり、その意志が生産の目的と標識とを決する。その意志によつて用いられるものが生産能力であり、これに人的能力（勞力と技術）と物的能力（資源と資財）との別あり、また生産

收益を無償的に造出するもの（勞力と資源）と有償的に造出するもの（技術と資財）との別がある。それらの能力を用いて意志が生産行動に出づるが、これに生産方法と生産様式との進歩（産業革新や分枝勞作の如き）が含まれる。多様な生産行動を一の機構に盛つて一定の生産目的を遂行するものが生産事業なるが、この事業實營が私別的なるか公共的なるか、また資本所有者を主任とするか勞働實營者を主任とするか、によつて種々の生産業體の別を生ずる。この生産業體の相違は必ず事業實營に對する總體運營を或は社會自然的に或は國家意志的に異ならしめ、それが結局には、邦國又は一世代の生産體系を特徴づけるのである。かくて邦國經濟の發達階段を示すものは生産體系の世代的變化であり、その生産體系を變化せしめるものは主として生産業體の時代的變化である。我々はそれを指標として經濟發達階段を見ることとする。

二三 經濟發達の六階段

以上述べた指標によつて邦國經濟の發達階段を見れば、大體において左の如き六階段の變化をなし、またなさうとしてゐる。

- 第一階段 同族協營生産體系（自足提供）。
- 第二階段 私別勞働生産體系（交換提供）。
- 第三階段 私別資本生産體系（流通提供）。
- 第四階段 公共資本生産體系（公配提供）。
- 第五階段 公共勞働生産體系（供配提供）。

第六階段 全體總營生產體系（具足提供）。

以上の六階段の中にて現在までに現はれたるものは第四階段までにて、第五階段は近き將來に現はれるであらうが、第六階段は遠き將來に期待されるものである。

第一階段の同族協營生産は初發的な生産體系であり、自給自足する共同經濟であり、多くの種族に共通したものである。この同族協營は同族が群族から部族へ氏族へ大家族へと分解するにつれて、人口及び願望の増加が自足需要を充たし難くなる。そこに生産方法の進歩を須つて剩餘産物の交換から特に交換の爲にする生産が起る。交換に加はる生産に始めて企業が起り、それが廣まる所に第二階段の私別勞働生産體系が出現する。最初の企業は剩餘産物を提供する農業でも初期の商品を提供する手工業でも、すべて勞働營爲者が私別的に起こせるもの又は相續せるものであり、公共の生産業も資産を持つ私人の企業もまた起らない。この私別勞働企業は社會自然的に家業として自生し發展せるものにて、封建制の政治力に由來せるものではない。それは却つて封建制の財政によつて生産物が不當に課徴され、生産が抑壓されたので、生産體系が第二階段から第三階段に移ることとなつた。私別勞働生産は次の私別資本生産によつて更に壓迫され衰微して行つたが、それでも我國には中世式の第二階段が農業及び手工業に幅廣く殘留してゐる。この勞働主義企業が次ぎの二段の資本主義企業によつて終に破滅するか、或は新時代の勞働主義生産を開らく伏線となつて回春の悦びを迎えるかは、日本經濟の運命にかかはる一大事である。

第三階段は近世に現はれた私別資本生産體系であり、ここに資本所有者の企業が勞働營爲者の企業に取つて替つた。ここにていかにして資本が企業を引受けるほどに増大したか、産業革新と言はれるまでいかに生産方法が進歩したか、またいかに國富の生成にとつて歴史上未曾有の盛運を齎らしたか等々については、近世經濟學が審らか

に説く所にて周知されてゐることである。かくて私別資本生産は國富の生成には劃期的成果を擧げたが、反面に、國富の歸着については貧富の懸隔を甚しからしめ、それが引いて流通商品の需要と提供との均衡を破り、國富の生成をも抵制するやうになつた。この傾向は創意を發動せしめる競争資本主義の時代を過ぎて、己得の位置を守らうとする獨占資本主義の時代に入るに到つて顯著となり、この生産體系の缺陷を曝露した。そこで私別資本主義生産の成熟した國々では、自由資本主義から改修資本主義に移り、先づ國富歸着について國民生活を保障する社會政策を執り、次いで國富生成については大企業獨占の制限や中小企業の保護や恐慌の救済豫防などの産業統制策を執るやうになつた。然るに近世の一特色たる自我自覺の普及するにつれて、改修資本主義に移る以前の自由資本主義を變革して、萬人平等の新社會を實現しようとする思想及び運動が起つた。それが社會主義であり、その中にて最も強い影響を與えたものがマルクス、エンゲルスの唱えた科學的社會主義である。ここからロシヤの共產主義革命が起り、第三階段を超ゆる第四階段の生産體系が出現した。

第四階段として今世紀初期に出現したロシヤの共產主義（社會主義）經濟は第三階段と對蹠的な行き方を執り、私有資本を國家に收奪し國有資本を以つて國家が産業を實營する公、共資本生産體系となつた。ここでは資本所有と産業實營とが私人から國家に移動したが、資本所有者が産業實營者である點は、第三階段と同様なる資本主義生産體系に止まつてゐる。もしも社會主義が有産不勞者を斥け無産労働者を生きがい働きがいあるものとなす趣旨ならば、資本を前者から奪つて後者に與え、前者の産業實營を後者に移すのが常道であるはずなるが、どうして國家資本生産體系を打建てて無産労働者を強制的に働かしめるのであろうか。しかもそれがマルクスの豫見に反して私別

資本主義の成熟せる國に起らないで、それが未熟なるロシアに起つたのであろうか。更にまた共產革命後三十八年を経る間に、私別資本主義經濟の成熟せる國々の中にて一國と言えどもロシアに倣つたものが無いことはなぜだらうか。「資本主義より社會主義へ」の標語は錯覺ではなからうか。すべてこれらの疑問は、第三階段までに起つた經濟發達の階段とは殆ど全く違つた事由がそこに存在するのではなからうか。然り確かにその事由があると思うが、私の考究はまだ未熟であるから、これまでに思いついた事柄を擧げて識者の叱正を仰ぎたい。

一には世界經濟が出現するに到れば各邦國經濟が連結されるのみでなく、そこには世界社會自然勢力が新しく發生し運動し始める。世界恐慌や世界戦争の如きは、これまで無かつた新しい社會勢力の動きである。世界社會勢力は各邦國に向つて一齊に働きかけるが、これを受ける側の各邦國は特殊性を持つてゐるから、必しも一樣な變化を生ずるのではない。殊にその變化の相違は各邦國經濟の進歩階段に見られる。經濟發達階段は邦國によつて異り、近代産業の進歩階段の相違は、高低さまざまに世界經濟線に凸凹線を描いてゐる。その場合に進歩階段の低い邦國は、必然に世界社會勢力を受けて壓迫される。これがレーニンの謂ゆる弱い環であらう。この場合に世界社會の自然勢力に或程度まで對抗し得るものは、國家意志威力の外にはない。その國家意志力を強めるには第一には邦國經濟の實力を強め、次は國防力であり次は文化力である。經濟力を強めるには生産において先進國と肩を並べる所まで進出することが第一階程となる。かかる方向においてロシアの指導的人物に詔向きの智慧を授けたものが、その人々の熱心に學んでゐたマルクスの思想及び號令であつた。

二には近世ヨーロッパは自我自覺の普及せることを一特徴となし、ここに英佛の政治革命が起つた。他の諸國もこれに倣つたが、ひとりロシアのみが庶民の間に民主思想が未熟であつたからその革命が後れた。その政治革命と

共に或はこれに乗じて經濟革命が合併されて起つたのが、第一次世界戦によつて刺激と機會とを與えられた共產主義革命であつた。ここでは特にマルクスの思想及び號令がロシア共產黨を指導した。

三にはロシアの政治經濟革命は貴族獨裁國家に代つて政黨獨裁國家を成立せしめたが、これにてその邦國經濟を一舉にして自然經濟から意志經濟に推し進めた。邦國經濟の意志性は近世初期の國產獎勵策に萌芽を發し、次の自由經濟を経て統制經濟に及び、自由資本主義期から改修資本主義期に入つて次第に成長して來た。それがロシアにては一舉に統制以上の總統體系に突入して邦國經濟を國家意志の傘下に收めた。世界經濟が固成されて行くに従い、いづれの邦國經濟も次第に意志經濟化し行くことは必然である。それが特にロシアにあつてはマルクス説に隨つて始めて公共主義の生産體系を執ることとしたので、その意志經濟化は當然の事であつた。

四にはロシアでは共產主義經濟を成功に導いた種々の事情があつた。その一にはロシアは世界陸地の六分の一を占める廣大なる領地に未開發の資源を豊富に持つてをり、これに配するに農奴解放後間もなく、働かざる者は食うべからずと公言する憲法の下に使役し易い二億の人口を擁してゐる。この物と人との巨大なる生産能力を驅使する強大なる生産意志が動き出せば、國富の大増産は期して待つべきであつた。その生産意志は獨裁國家意志である。その意志がその能力を用いる生産行動の方法と様式は先進國の長所を採つて行えばよい。そしてその邦國生産から生ずる資源収益と労働収益とは、一應悉く國家の手中に收められて、労働者その他に支拂う給料の外は、殆ど國家資本の集中的蓄積となつて、異常なる生産の擴大を可能ならしめた。その二はロシアでは私別資本主義經濟が幼稚でなく未熟程度であつたので、先進國の産業水準を標的としてこれに迫着かうとする計畫を立てることが困難でなかつた。この點は日本が明治初期に近代産業の處女地に無より有を生ぜしめる官有・官營を始めたことに比べて遙

に容易に遂行された。されど追着いた後に追越そうとする階段になれば、もはや生活資料と鞭とを以つて労働大衆を便役する行き方では成功し難い。それには強い創意と責任を懷く労働者をして當らしめなければならぬから、やがて共産主義經濟が最後の階段でないことを實證する日が來たるであらう。その三はロシアが私別資本主義にて産業を進めようとするれば、先進國から資本を受容れることが定石となるが、そうすれば生産收益を多く他國に分配しなければならぬ、また投資國の制射にて自國の要望する通りに國産を進めることが困難となる。そこでロシアは私別資本の作用を排し、時に穀物の飢餓輸出を敢行するほどに輸出代價を以つて資財、特に機械類を輸入し、國産より生ずる收益を國家に集中して公共資本を増殖し産業の急激な増大に努めた。その四はロシアでは私別資本主義經濟の未熟なることから、先進國のような強力な資本家階級の抵抗を受けないで、中世式の支配階級を排除し民有の生産手段を沒收することが出來た。この點はイギリス労働黨の場合と大差がある。

以上の諸事由にてロシアは後れたる産業革新を速に完遂し、その上に近代産業を大規模に建設することが出來た。私別資本か公共資本かの大なる相違はあつても、資本を以つて近代産業を實營し、かつまた個人の生産手段の外に個人の生産意志までも收奪して、これを國家の生産意志に結集したところに成功の鍵がある。社會自然力の動きには晴天もあり雨天もある。國家意志力にて進めば、思い違ひがあつて度々仕直ほすことはあつても、絶えず社會自然力を操つて計畫的・組織的に前進することが出來る。ここに意志經濟の特色があつて自然法則の外に意志法則が働き出し、意志經濟の面目を現示してゐる。我々は決して現在の私別資本主義の國々がロシアのような公共資本主義に推移することは考へてゐないが、近世的な自然性の邦國經濟が現代的な意志性に成長する趨向あることは疑い得ない。それにしては日本經濟が現在の如き疲勞し切つた國家意志の下に立つてゐることを見ると、曾ての日本は今

どこへ往つたのだろうかと怪まざるを得ない。

ロシア共產主義經濟は國富の歸着については、まだ甚だ不充分にて先進國に及ばないが、これは漸次に向上するであらう。そして國富の歸着を普及せしめる爲の國富の生成について大なる成功を収めつつあることは、共產主義を好まない者でも事實の前にそれを認めざるを得ない。しかしそれだからとて資本主義の次には社會主義が來ると信じて、資本主義の國々もやがて社會主義に移るものと期待することは大なる錯覺である。ロシアの成功はロシアであつたからであり、ロシアに類似する點の多い中國も自國に適應するように巧妙な進み方をすれば、暇とることばあつても、社會主義經濟に成功する可能性が多い。されど舊資本主義によつて已に世界の高い産業水準に達してゐる國であれば、これを新資本主義の社會主義に變轉せしめたところで、別に劃期的な進歩があらうとは考えられない。否、否、高水準の邦國經濟がそれ以上の進歩を來たすには、各人の創意と責任とを總動員することが決定的に要請せられ、その點は社會主義とは正反對の方向に立つのである。物財の愛用され難い資本公有化に熟し、自主労働の高い意義を認め得ないマルクス主義では、國富の高度の生成は望まれない。生活保障の不充分な國では社會主義に憧れる者が多いが、その點は社會主義でなくとも立派にやつてゐる國が少くない。

マルクス説では資本主義經濟の窮迫が必然に社會主義經濟に進出せしめると見たが、實際は資本主義經濟の未熟であつたことが、先進國に急ぎ追着く爲の階段として社會主義經濟國を出現せしめたのである。そこでここに新しい問題が提起される。然らば資本主義經濟が成熟し窮迫した國では、そこから果してどこに往くのであらうか。今までの所では自由資本主義が爛熟して多くの缺陷を生じた國では、いづれも社會政策と産業統制策とを執る改修資本主義に移りつつある。資源生産力の豊かなアメリカ諸國ではこの邊に踏み止まり、社會主義に移らうとする氣配

は少しもない。されど資源生産力の乏しい労働國では、生産収益としては労働収益の外に資源収益に期待し得ないから、私別資本主義のままでは労働者に酬ゆることが出来ず、資本主義の改修も思うままには出来ない。そこに多分に社會主義に誘惑される氣配があるが、産業の民有・民營を官有・官營に改造して見たところで、國富生成の増進を期待する何の據所もない。ここにおいて改修資本主義もまた頼み難く思はれる國にあつては、何としてもこれまでに無かつた新しい生産體系を工夫してこれを實現する外はない次第となる。それは即ち第五階段として現はるべき公共労働の生産體系であり、その外には考えようがない。

第四階段の公共資本生産體系・即ち社會主義經濟は第三階段の未熟期より出發し、その殘された成熟期間を飛躍して社會主義化したものである。これは邦國經濟が意志經濟となり、國家意志力が自然的推移を乗り越え得たからである。これに似て第三階段が爛熟せる場合には、大戦後にイギリスが八の公益産業を國營化し、フランスが公益産業をすべて國營化すると宣言したように、一應は階段を追うて社會主義化を手懸けて見るが、しかしそれは一向に發展する氣配を示してゐない。なぜだろうか。それは社會主義には爛熟せる資本主義を救う力がないからである。そこで私別資本主義の國は、一應は階段的に公共資本主義に一べつを與へるだけに時代の意義を見て取るに止め、早速にても第四階段を飛越えて第五階段に移つて行く運命に立つてゐると見るべきであらう。ロシアの社會主義經濟としても、謂ゆる後期の共產主義時代ともならば、必要に應じて分配すると言うような毒にも藥にもならぬ宣言の實施よりも、公共資本主義の強制労働を緩和し、労働者をして樂んで働き得しめるような生産機構の變化が必要となるであらう。それは第五階段に近づくことに外ならない。

四 公共労働生産體系

第五階段の公共労働生産體系は第二階段の私別労働生産から糸を引いて第三及び第四階段の二つの資本主義を通せる後に出現する新しい労働主義經濟である。何と言つても生産は労働者の使命とする所であり、「共產黨宣言」に言うような所有問題を根本とするものではない。たとえ資本が社會化され公共化されたところで、それだけで労働者が解放されて労働が人生にとつての悦ばしい意欲となり、人間が自分等の社會經濟關係の主人となるはずもなく、またその事實もない。資本所有者が主人となることを斥け、労働者が協力して企業の主任者とならうとする思想及び運動は、前世紀の後半に現はれた組合主義である。これは中世の労働主義企業から糸を引いて英佛獨に現はれたが、その特色は非國家主義であり、邦國經濟が意志性となる時代に逆行するところに、不成功に終る外はなかつた。

公共労働生産體系は邦國經濟における事業實營と總體運營とを區別する組織を立てるところに、公私の資本主義と違つた労働主義經濟となる。事業實營の主體は資本家でも資本國家でもなく、企業労働及び作業労働を合はせた労働者社團である。私はそれを會社や官業所と區別して公社と名づける。公社の事業實營の上に國家が總體運營を行ひ、國家の企畫と指令によつて國富の生成及び歸着を運び行く。

公社において企業労働と作業労働とか結合することは、會てのイタリヤに見た工場占領の失敗に顧み、ドイツのツアイス工場の成功に見られる如く、今後の生産業體の在り方を決定する。會社や官業所と異り、すべて労働營爲者を主人とする公社にして、始めて労働者の解放が行はれ、勞資對抗が解消され、ロシアにはまた存在する労働組

合も無用となる。私別資本主義の運命は生産過剰による恐慌の増大よりも、むしろ勞資對抗闘争による生産停止の方にかかつてゐる。これは勞資双方に損害を與へると共に、邦國經濟そのものの進行を阻むこととなる。

公社の特色はそれが自主性、公共性、とを兼備するにある。公社は會社の如くに産業の實營について發企・計畫・實行・審査・收果の行程を通じて自主的に活動する。この點は社會主義下の官業所と全く異なる。公社の公共性は財物又は作務の對世提供が公事であり國業であるところに基き、一定の公法的なる責務及び權能を有せしめるにある。その責務は生産行程において不可能なる狀況に陥らない限りは、絶えず一定の提供を持續すること、總體計畫に基き提供について國家より發する指令に隨うこととの二つである。その權能は提供に必要な生産能力の配當を保障され、事業體の失策でなくて營業の持續が困難なる場合には國家の救援を受けることと、經濟國策の決定機關(後述の經濟運營會議)に部門事業を代表する議員を選出し参加せしめることとである。以上の責務と權能とは對照的となつてをり、公社の位置は國の統治に自治體ある如く、國の經營における自營體の任務を執る公法人たるにある。公社には擔當する業務の性質に適應するように、官立公社、自治體立公社、民立公社、組合式公社の種別が設けられる。今の官立公社や自治體立の産業部も、自立會計の外に一般勞務者の實營參加を認むるならば勞働主義の公社となる。民立公社は新設の外は現在の會社から脱皮して資本主義より勞働主義に移ることによつて成立する。それは會社の社長・重役以下の實營幹部が勞働組合と合體することである。會社の實物資産は公社の所有となり、會社の出資者は資産評價によつて社外出資者の位置に移り、事業收益から分配を受ける。この不勞所得も資本貯蓄の必要な時が来るまでは、濫存すべき國策として認められる。組合式公社は小企業の協同實營の爲に必要であり、家業として營まれてゐる農業及び手工業の如きはこれに加つて行く。公社の機構としては、社長、重役會、代議員

會、社員總會（又は總投票）の權能を定款に明記してこれを嚴守し、集團的利己行動を封ずることが大切である。公共勞働主義は勞働者の事業實營の上に國家が總體運營を行ひ、國富の生成及び歸着について企畫し指令することを特徴とする。私別資本主義では國家は退いて邦國經濟の運營を社會自然力に委ねる。公共資本主義では總體運營以上に事業實營までも國家の手に掌握する。公共勞働主義は邦國經濟の意志性に着眼し、國富の生成及び歸着を國家の總體運營とする總統體系に收め、事業實營を各人の創意と責任とを發揮せしめる自主的生產業體に任かせる。運營意志と實營意志とが各その所を得てその任務を完うする。

總體運營機關は經濟國策を決定する經濟運營會議と國策を實行する經濟省と國策の調査立案と國策實行の成績審査とに當たる經濟企畫審廳との三者とする。その中にも經濟運營會議に事業實營の責任を持つ公社の代表が參加することは、運營と實營とを運ねて國家指令の妥當と公社の實行責任とを保障することとなる。

私別資本主義經濟が爛熟した後に出づべきものは、公共資本主義でなく公共勞働主義である。イギリスの國營産業が官俵式でなくポールド・システムにて實營せられる點や、ドイツにて會社と勞働組合から同數の代表者を出して實營の協同決定をなす制度には、會社より公社への行き方が見られる。シエンペーターによれば、イギリスの經濟學者にはソシアリズムに傾く者が極めて少く、さりとてキャピタリズムを支持しようとする者は更に少く、將來については沈思默考してゐるが、そこには勞働者の利益を擁護する政策と言う意味にてのレーボアリズムが頭を擡げてゐると。これは含蓄の深い言葉であり、私はそこに社會主義を超えた新時代の經濟體制を展望する。

五 資本主義より勞働主義へ

今後に國家意志の發動によつて公共勞働生産體系が出現するならば、これにて經濟發達の階段は盡くされるだらうか。否、自主的勞働企業を重點としてこれが公共的に實營され、且つその上に立つ總體運營が意志法則に適合するように行はれて行けば、いつの時にか公私と勞資との區別も化合されて、そこから全體總營の邦國生産體系に到達するであらう。これが最後最高の第六階段である。ここはマルクス、エンゲルスが言つたような國家死滅後に出現する自由個人の自由連合社會ではなく、人々が何の強制をも受けず心から相結ぶ親和の共同生活體が運營し且つ實營する道德國家の總體經濟となり、その總體の中に各個が満足することとなるだらう。消滅すべき國家は必要惡とも見られる權勢國家であり、それ無き所に道德國家が完成するのである。

經濟發達の六階段では、最初と最後とにおいて、公私も勞資も未分であつた同族協營經濟と、公私も勞資も一つに融合する全體總營經濟とが相呼應する。その間に立てる四階段において分別された公私と勞資とが入替つて結びつくことによつて、私別勞働主義、私別資本主義、公共資本主義及び公共勞働主義の生産體系が順次に發展して行く。國家が幼年時代である間は公共的生產業體はなく、生産資本の蓄積なき間は資本的生產業體は出ない。そこには私別勞働生産業體の外は存在し得ない。次いで生産資本が増殖された時に、前階段の私別體系をそのまま承けて、勞働企業から資本企業に移り、個人の獨創心を發揮させて歴史上未曾有なる國富の増加を齎らした私別資本生産業體を生じた。然るに世界經濟の出現はこれまでの邦國經濟の進路に新しい方向を與へ、私別資本主義の未熟なるロシアは急速に國富の生成を擴充する爲にマルクス説を奉じて前階段の資本企業をそのまま承けて、私別體系から公共體系に移り、公共資本主義の生産體系を執り、他にこれに倣う國も出た。現實の經濟發達階段はこゝまでであるが、この先きに出づべき今後の第五階段は、第四階段の公共體系をそのまま承けて、資本企業を勞働企業

に轉換する公共労働生産體系の外には他に往くべき方途はない。資源が豊かであつて私別資本主義を改修によつてなほ持續し得る國はそれでよい。同じく資源に富んで労働大衆を強制勞役に驅り立て得る國は、公共資本主義を執ることが得策である。しかし資源収益を多く期待し得ず、労働者の教養高く煽動と強壓の下に働くことを肯じない状況にある國にあつては、私別資本主義も公共資本主義も共に邦國經濟の進運に貢獻する資格はない。日本經濟は必然に公共労働主義に出づることによつて前途に光明を認め得る。日本邦族の古ながらの優れた勤勉性は、經濟國運を開らく最後最上の切札である。公私の資本主義より新労働主義へ。中世から近世を通じて現在でも、私別労働企業において善く働いてゐる農村人や手工業者を顧みつつ、建國以來の傳統を護る國家が繼續する所の現代の公共労働主義へ。